



# ドイツ・犬物語 ⑥ ～ベルリン動物ホーム訪問記(後編)～ 「すべての犬に温かい家庭を！」

好評連載  
第6弾!

広大な敷地と百名を超す職員をかかえるベルリンの動物ホーム。  
行政の援助は受けず、動物愛護協会会員の会費と民間からの寄付だけで運営している。  
現在保護中の動物は千匹を超え、そのうち犬の数は約3百頭。  
すべての犬に新しい飼い主を見つけることがホームの目標だが、果たしてそれは可能なのか？

雪景色の中のベルリン動物ホーム。コンクリートの打ち放しの無彩色の建物は、見た目は冷え冷えとしているが、犬のパビリオン(収容棟)に足を踏みいれるとほのかな暖かさに身体が包まれほっとできる。暖房器具が見当たらないと思ったら、パビリオンには床暖房が施されているという。



職員に連れられて動物ホームの敷地内を散歩中の犬



円形のパビリオンが12の部屋に仕切られており、奥の白い部分は雪の積もっている庭

お昼寝中の犬が意外に多く、思わずこちらも息をひそめて寝顔をのぞきこむ。その一方で、氷点下10度の寒さも意とせず庭に出て周囲の様子を伺っている犬もいる。1つのパビリオンは12の庭付きの小部屋(部屋5.5㎡、庭16.2㎡)に分かれていて、「猫ドア」をくぐれば自分専用の庭に出られるようになっているのだ。このスペースに、大型犬なら2匹まで、小型犬なら3匹までが居住しており、庭に面した仕切りは大きなガラス張り、庭の半分は屋根で覆われている。犬たちが風雨にさらされずに光や新鮮な外気に十分触れられるよう工夫が凝らされていると、訪れるたびに感心せずにはいられない。

掃除と餌やりを終えた職員からブラッシングをしてもらい、病気になるば専属の獣医の治療を受ける。職員やボランティアに散歩に連れていってもらい、毎日とはいかないがドッグランで駆け回ることできる。これは1人部屋住まいの犬にとっては他の犬たちと交流できるいい機会でもある。まるで「優雅なホテル暮らし」のように見えるが、この犬たちには一番大切なものが欠けている。マイホーム、そして愛情を注いでくれる飼い主だ。

収容中の犬にできるだけ快適な環境を提供しようとホームは努力しているが、最終目標はもちろん、「すべての犬に愛情深い家庭を提供すること」だ。ドイツのペットショップは犬を販売していないので「犬を飼おう！」と思えばまず動物ホームに出かけるのが定番だ。このホームは毎年2000頭ほどの犬を新しい飼い主に紹介しているが、最近は不況が影響してか引き取り手の数の方が少なく、すでに収容能力の限界まできているという。では、これ以上収容する犬が増えたらどうするのか？広報のケーニツヒさんによると、そんな時は各地にある動物愛護協会と連絡を取り合い、空きスペースのある施設に犬を移送するそうだ。「殺処分」はドイツでは行われないと彼女は断言する。

だからといってホームが「死」と無縁というわけではない。犬が助かる見込みがない病気を患い、痛みがひどく生きていることでかえって苦しみが増えたと判断したときに限って注射を打ち安楽死させるといふ。高齢の犬、問題行動のある犬、そして「危険とされる犬種」の犬は実際には新しい飼い主が見つかりにくい、それは安楽死の理由にはならない。同ホームでの犬の平均滞在期間は3か月。すぐに新しい飼い主と巡りあう幸運な犬もいれば、3年以上の長期滞在犬もいる。

新しい飼い主に引き取られていったのに、また路上で保護されホームに舞い戻ってくる犬もいる。そんな不幸が繰り返されないよう、ホーム側は受け取り希望者の意志と生活環境をチェックする。訪問時には犬をじっくり観察し紹介窓口で十分相談できるよう閉館の1時間半前には来ること、犬と同居することになる者が全員来ること、すでに飼っている犬も同伴させることをホームは薦めている。また生活環境については、借家住まいなら大家の許可は得られているのか？同居人にアレルギーを持つ人がいないか？そして、1日に最低3回計2時間犬を散歩に連れ出せるかといった質問を受ける。



パビリオンの中の部屋の一つ「猫ドア」があり、庭に出られるようになっている

1日3回計2時間—かなり犬好きな人でもちょっと躊躇するのではないだろうか？おまけに犬は原則タダでは受け取れない。治療やワクチン代、去勢避妊手術を施した場合の費用などの一部を新しい飼い主が負担することになっているのだ(最高205ユーロまで)。決して大金ではないが、節約家のドイツ人にある種の覚悟を求めるときのきっかけになっているのかもしれない。すべての犬に幸あれ!と願いつつ、動物ホームを後にした。

注: 1ユーロ=約130円

池永 記代美 (ベルリン在住)